

#### ④ 教室風景

明治三十五年三月四日、六日、八日の『民声新報』に掲載された記事を転載する。

#### 續東京美術學校參觀記

#### 濱 涯 生

去る金曜日、午前九時寓居を出て、人車を驅りて東臺に向ふ、其目的は、豫て本紙に記載したりし東京美術學校、第二回の參觀として、同校を見舞はんが爲めなり、曩日は、單に漆工科、鑄金科を瞥見せしのみにて、其他の教室を見るの違なかりしを以て遺憾ながら余が爲めに案内の勞を取られし同校職員辻村松華と、再會を約して訣れを告げれば、今回は其約を履んで、參觀を爲したるなり、辻村氏本姓は近藤、今は養家の姓を冒して、辻村と稱す、前回に近藤松華とせしは、今回の辻村にして、此事讀者の便宜の爲め、預め此所に加筆し置かざるべからざるの要あるなり先づ當日同校表門を入りて、左に學士會院の前を通りて、漆工科に至る、途中梅樹蒼を破つて、紅花芳香を放ち、人をして仰視羨涎に堪へざらしむ、東臺の春色綠ならざるにはあらねど、桃櫻梅李の眺め、又一層なり、到れば松華氏盛んに業を執りつゝあり、一禮直ちに過刻の長坐を謝し、第二の約を履むべく來りし旨を告げ、授業の隙もあらば、余が爲めに案内せんことを需む、氏直ちに之を諾し、休暇時間來るや否や、余を導きて各教室の參觀を爲さしめたり。

先づ彫刻科の一部たる塑造室に入りて、石膏の人像を見る、婦人

の裸體立像二は、辛ふじて形のみ出來上れり、受持教師は、今や人頭の石膏附着に忙はしかりき、而して又其側らなる一人の生徒は鑿を以て、石膏面の覆土を剝ぎつゝあり、其技頗る熟せり、四肉には多くの人体模型を飾り置く「マ」と雖も西洋人と日本人とを比較すれば、何となく邦人の體格の方劣等なるの歎ありア、。

石膏工場を辭して、モデル塑造室に入る、余は此室の事を記するに先ち、説明便利の爲め、彫刻科なるものゝ、如何なる種類を含み居れるかを述べざるべからず、彫刻科とは、木彫、牙彫、石彫、塑造の各種を含有せる複雑なる學科なり、而して彫刻者に於ては、塑造の技に熟するに非ざれば、精妙なる製作を爲す事能はざれば、木彫と牙彫と石彫とを問はず、皆生徒をして油土を以て、模型を精細に作り出さしむる事に注意す、余が觀しモデル塑造室には、二人の少女あり、一は十二歳、一は十六歳位にして、此二少女は、密閉せられたる教室内に在りて、裸體となり、暖爐の火氣盛なる側に立ちて、受持教師監督の下に、生徒は熱心に實物塑造に勉むるなり、余は休憩中に其室に入りたる事なれば、二少女も帶を解きたるまゝ、衣を纏ひ居たりしが、外人人には、容易に實習中は、參觀せしめずといふ、然もあるべし、余は其受持教師藤田文藏氏に面し、氏より諸種の説明を聽き模型を見居ること十分時にして、火氣の密閉の爲めに、長く止まる能はずして、其室を出でぬ、室内の温度は、華氏の七十度を示し實習の際、少女は十五分若くば二十分毎に、休憩するといふ。

夫より二階に昇り、四年生の卒業製作品を畫きつゝある、日本畫教室に入る、此所には、寺崎廣業、下村觀山の二將あり、今や生

徒の書きし人物家屋に向て、批評加筆しつゝあり、此を辭して階下に降り、廊下を表に進みて、一年生の日本畫教室に入り、生徒の實習を觀る、其畫く所各異り、或は太鼓、或は笙笛琴と、實物を坐の中央に置き、四周より之を視て、隨意に畫く、筆端精緻、余の如き粗放なる腦漿にては、到底三日と續くものにあらず、練習か性質か余之を知らずと雖も、隨分面倒臭き仕事なるかな。

器物寫生を觀りて、更に西洋木炭畫室に行く、石膏細工の人頭、立像多く陳列せられ、生徒は思ひ々々に、之を畫く、透かし視るものあり、離れて視るものあり、仰ぐもの俯すもの、体を傾くるもの、殆んど名狀すべからず、此所を去りて、食堂に出づれば、同所には、幾多の懸賞圖案排列せられ、千葉縣教育會の功彰メダル案も其中にありき。

食堂の次なる室は、豫科二年生の草花寫生にして、岡田秀氏の監督する所、生徒或は柳菜種に畫くあり、或は椿梅を眺むるあり、満室殆んど花ならざるはなく、又綠ならざるはなし、此中に在りて、教授を執る教師其人の愉快と、女子教育に携はる人々の一生こそ、實に樂しけれ、夫より進みて次なる室に入れば、此所には二十四五歳斗りの婦人あり、小高き圓臺の上に坐して、モデルとなり、生徒左右より之を圍んで寫生せり、頭髮は銀杏返しにして、人品も餘り賤しからざりし、乍併余は別段此婦人に向て、讚辭を呈するなどゝの慾心は、毛頭もなきことにて、唯生徒の熱心に之を眺め、寫生に努むるを賞するのみ、

此所を辭して次なる室に入れば、此は三年生の教室にして、或は熊を模寫するあり、或は鶏の幅を手にするあり、壁間には伊賀光

雅の武具を着けたる武者繪あり、下村觀山の監督に係ると岡田氏言ふ、夫より二階を下りて、彫刻科の本山ともいふべき塑造室に入る、此所には、帝室技藝員にして同校教授たる、高村光雲氏控へ居り、余が案内者たる辻村氏と其室に入るや、翁は莞爾として笑ひ、溫乎たる其容を向け、先づ互に一應の名乗りをなし、翁の説明を聽く、諄々として倦まず、翁彫刻に對する意見を述ぶる事審らかなり、余は他日を期し其高見を敲かんとすれば、詳細を聽くの暇なく生徒が老婆のモデル實習を凝視したり、此老婆は年齢七十歳位にして、顔面波を湛へ形容枯稿せりと雖も、元氣能く見えたり、老婆は椅子に腰を掛け、生徒は油土を以て熱心に塑造せり、此技に長ずるに非ざれば決して彫刻に巧みなること能はずと。余は辻村氏に伴はれて、翁の許を辭し、夫より廊下を通りて、別建物の二階に昇り、圖案科に至る、同所には、千頭庸哉氏ありて、第五回内國勸業博覽會の噴水器の圖を引けり、其隣室には、漆工科の生徒ありて圖案に意匠を凝らせり、其傍らには、大なる花瓶に梅花を挿みて、香氣馥郁、人衣を襲ふの想あらしむ、余は漆工科生徒の圖案科に赴きし、其休課時間に際し、受持教師辻村氏の案内を得たるは、余の大に悦ぶ所なり、又參觀中余に便宜を與へられたる諸氏に向て、謝意を表す。

余性撲質、書畫の嗜好なし、今日斯道の熱心家の唱ふる美とは、如何なるものを指すか、美術の進歩とは、如何なる點より何なる階級に進みしをいふか、聊か疑なき能はず、又教授上に於ても、個人教授が、果して世を益し、斯界を改良する偉人を生ずる法なりや、マイケル、アンゼロ容易に作り出すべきか、團隊教授は、

之を施し難きものなるか、是須らく教育上研究を要すべき大問題なりとす、此等の事は追て他日に譲り今は唯見聞の一端を記述せるに過ぎざるのみ (完)

## ⑤ 教師および授業

『美術旬報』に明治三十五年入学、同四十年彫刻科卒業と思われる人の教師や授業に関する回想記が載っているので転載する。前半は第五百十七号(大正七年四月十九日)に、後半すなわち「◎デッサンの時に」以下は第五百十八号(同年五月九日)に掲載されたものである。「」は編者による補足または訂正である。なお、参考までに言えば、この年度の彫刻科生徒は小倉右一郎・勝尾準太郎・加藤直泰・武田榮・中村武平・藤井浩祐・吉田祥三・吉田政一・朝倉文夫(撰科)、池田勇八(同)、佐野長吉(同)である

## 十五年前の美術學校生活

黒 旋 風

◎私が美術學校へ入學したのは三十四五年頃でした。其頃の學校は勿論舊館であつて、今は市區改正の爲にスツカリ變つてしまつた。回顧すれば十五年、「マ」前地方の學校を出たての田舎者が、始めて上野廣小路から公園にやつて來た時には、流石は我國美術の最高學府に所ありと思つて實に嬉しかつた。年頃此學校へ入學せんものと憧憬(あしがたれ)てゐたのも當然な理想であつたと思つた。でも入學して見ると其頃は假入學と云つて塑造と、木炭畫と、日本畫とを一週間宛習ふのであつた。木炭畫は岡田「三郎助」先生で洋行歸りのホヤ／＼で生徒に大持(おおもて)であつた。先生も其頃はまだ若くフラ

ンス歸りのハイカラで、色は白く、頭の毛は綺麗に分けて水の垂れる様な立派な男振りであつた。誰であつたか教室の中で口笛を吹いて叱られた事があつて、恐しく威嚴のある良先生と思つたが、今は年のせいか白髪が髻にまで見へて來て昔日の儂がトントなくなられた。

◎塑造の先生は黒岩「淡哉」先生で、色の眞黒い疣蛙(むしづゐ)の様な顔をして、靜かに薄水を踏む様な足取りでスツツと教室へ這入つて來るので茶目連は大に閉口したが、然し叱言は決して云はず、何時もむつりとして居て苦蟲を嚙殺した様な面をして居て假入學中は一度も先生の言葉を見た事が無つた。只廻つて來て直し乍ら上手いと一言云ふ位が關の山で決して物を云はぬ人で後に「人魂(ひとたま)」と綽名(あだな)が附いたものだ。然し好きな先生の一人であつた。今は大阪下りをやつて居るが江戸兒で食道樂の先生だつた。尤も其外にも道樂(だうがく)が在る、それは何でも四十年頃であつたらう、博覽會や何かで先生大分懷中(かいちゆう)が暖くなつたので、例の江戸兒氣質(かぢ)がじゆつとして居られず、池の端邊へ時々遊びに出懸けたが、奥様への口實に困り、丁度其時玉寶堂の文珠様を作つて居たので、三晩も流連して居た申譯を彼の無口の先生の重い口から、實は奈良に文珠様を見に行つて居つたとの苦しい云譯は、其先生よりは傍で聞いて居つた某氏は、飛んだ池の端の文珠様に御通夜をしてゐたのにと可笑しくつて腹を痛くしたそうだ。

◎日本畫の方は「荒木」寛畝(かんお)先生や、「川端」玉章先生が時々々見えた。外に一二の助手先生も廻つて來た。寛畝先生は童顏白髯の大男で老大家と云ふ風采、玉章先生の方は田舎育ちの私共にもへ